

耕^{かう}治^{はる}人^と全^{ぜん}集^{しゅう}第^{だい}五^ご卷^{かん}

一九八九年六月二六日発行

著者 耕治人

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一ー一二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六一六二七九九

堀内印刷・牧製本

© 1989 Yoshi Ko

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えます。

耕治人全集

第五卷



晶文社

監修

中川一政

編集委員

本多秋五

紅野敏郎

中島和夫

保昌正夫

村上文昭

題字

中川一政

ブックデザイン

平野甲賀

『耕治人全集』第五卷・目次

喪われた祖国

7

第一章 三つの顔

9

第二章 姿なき演出家

35

第三章 湿っぽい空気

57

第四章 三十四番の切符

79

第五章 さぐり合い

97

第六章 耳のうしろの赤い傷

122

第七章 呪縛

142

第八章 並木道

166

後記

186

小説 詩人蘿月

187

〔單行本未収録「非私小説」選〕

赤い絨毯 415

七人の花嫁 433

サンタ・マリヤ 456

国際商人 474

香妃の肌 493

赤い獄衣 514

解説 保昌正夫

551

喪われた祖国

第一章 三つの顔

帝国ホテルを出たスーザ・アンソニーは電車通りに添うて歩いた。ガードをくぐり少しゆくと、R新聞社の、やや卵色をおびた建物がある。

スーザ（親しいものからそう呼ばれる）は、受付で、大里俊次に会いたいと告げた。

大里は明敏な新聞記者であるが、それより政治評論家として知られている。第一級の中国通として世間では認めている。

スーザは受付の女から面会票に書くように云われた。ドイツY紙上海特派員と英語で書き込んだ。受付の女はおやという顔をした。白系露人と思っていたらしい。無理もない、スーザはアメリカ人だが、中国で七年あまり暮したのだ。四十位で、紺色の帽子をかぶっている。スカートはグレイ。ただ一つの飾りはやや赤味を帯びたマフラーである。それはスーザに涯しない拈がりと、深さをもった中国の大地をしのばせる色だった。スーザは生れ故郷のアメリカより、中国を愛しているのだ。

受付の女はそばにあった電話で、大里を呼んだ。大里がいるアジア課は四階にある。

返事があつたらしい。

「三階の応接間へどうぞ。そこにエレベーターがごいます。」

スーザが今朝オークランド号で、横浜についたことを大里は知っているのだ。彼女は船に乗る前、ニューヨークからそのことを大里に知らせた。ただ横浜で上陸出来るかどうか疑問だった。彼女の名は日本より中国や欧米に知れわたっていた。コミンテルンと、中国共産党の熱烈な支持者として。日本の軍閥をひどく憎んでいる彼女は、これまで一度も日本にきたことはなかった。機会はあつたが。しかし今度は違っていた。どうしても大里に会いたかった。横浜の役人はどういふわけか彼女の上陸を許可した。滞在時間が短いために違いない。今夜十二時オークランド号は横浜を出、上海に向うが、スーザはそれに乗るのだ。

——エレベーターは三階にとまる。

廊下に、壁を背に太った、贅沢な身なりをした大里俊次が立っていた。

互いにうなずき合う。一昨年北京で別れて以来だ。

「お待ちしていましたよ。」

大里の英語は流暢だ。語学は天才的で、中国語も中国人と同じように話す。スーザもそうだ。

すれ違う人たちはその女が有名な「中国の進展」の著者だとは知らない。しぼんだ、疲れた顔をしている。

応接室の扉の前に立った大里は、柱にかかった木の札を返す。面談中という文字が書いてある。彼の気持は重たい。一週間前麻布霊南坂にいるドイツ人ケブケに彼女の希望を伝えた。ケブケが組織し

ている諜報機関に、スーザが入りたいというのだ。ケプケは拒絶したのである。

スーザはがっかりするだろう。

「どうぞ。」

スーザが先に部屋に入る。大里は用心深く扉をしめる。

「あなたの元気な顔をみるのが出来て、こんなにうれしいことはありません。」

大里は、スーザの手を握る。彼女の手はゴツイ。アメリカの田舎の、貧農の家に生れた彼女は中国に渡るまで困苦の道を歩んだのだ。

「イリヤ、あたしたちはようやく会えたのね。日本の役人にお礼を云わなくちゃいけないわ。けど、わずか十二時間の滞在なのよ。」

スーザの眼が柔ぐ。彼女は上海で大里俊次をイリヤと呼んでいた。彼女だけでない。ケプケも中国の共産党の、上海支部ともいふべき駐滬政治顧問団の人たちも。大里は上海で二つの顔をもっていた。表面はR新聞上海特派員だったのだ。

ソファに掛けたスーザは北京やモスクワやベルリンの印象を生き生きと話し出した。スーザは半年前上海を立ったのである。モスクワではコミンテルンにいる仲間会った。ベルリンへ行ったのはX紙に考え直して貰うためだ。彼女はそこの特派員だったが、ヒトラーが政権をとると、コミニストである彼女を解任したのである。交渉はうまくゆかなかった。しかし彼女の努力は無駄ではなかった。工業都市ライプツヒから発刊されているY紙の特派員にやっとなることができたのだ。彼女のような仕事に従事するのは新聞の特派員になっている方が何事につけ好都合だった。ドイツからニュー

ヨークに渡り、そこから船に乗ったのであった。

「イリヤ、あなたと一緒にだったらどんなに楽しい旅だろうとよく思ったのよ。モスクワをあなたに見せたかった!」

スーザの表情は十七八の小娘のようになる。彼女の表情の激しい変化に、はじめ大里は驚ろいたものだ。それは彼女の激しい生活を現わしているようであった。

「あなたから便りを受取るというも僕はあなたのそばにいろような気がしましたよ。いつか僕もモスクワにゆけるでしょうよ。」

行く先々でスーザは手紙をくれた。彼女は誰れよりも深く大里と結び付いているようだった。大里は特派員として上海に赴く前からコミニズムに関心を持っていた。彼の生れた土地が当時日本の植民地だった台湾ということもあるかもしれない。若いスーザは苦学してニューヨークに出て、新聞記者になったが、そこで印度の亡命革命家タールと知合った。思想の共鳴から結婚した。タールと共に運動したため彼女は投獄されたことがある。その後タールと離婚したが彼のためアジアに対する眼を開かれた彼女は上海に渡った。仏租界に家を構えた彼女はある日パレス・ホテルのロビーで、大里俊次と会った。同じ特派員仲間として。はじめから彼女は大里に惹きつけられた。タールによって彼女の眼が開かれたように、大里は彼女によって国際的コミニストとして成長していった。そのとき彼は二十九だった。彼はいわば彼女の愛しい教え子でもある。やがて満州事変がおきたが、彼女は大里とその見透しについて論議したことがある。日本軍部の意向に反し、戦争は長期化し、それは第二次大戦にまで拡大してゆくだろう——彼女は今度モスクワやベルリンを廻って、一層その確信を得た。

第二次大戦はさけ難い。ヒトラーのドイツと日本のファシズムから、中国共産党を守らねばならない。そのため彼女は、ケプケの情報網に入ることを望んだのだ。彼女は上海でケプケと情報活動をしたことがあるのだ。

——スーザは大里がケプケのことを云い出すのを待っている、大里はそう思うので、重苦しい瞬間が襲う。大里はあたりに眼をやる。聞耳を立てる。それから立上り、太った身体に似合わずしなやかに歩き、スーザのそばにかけた。

「チャーリーはあなたが協力することを望まないですよ。どういうわけかって聞いてみたんですがね。」

スーザは意外な顔をする。チャーリーというのはケプケのことだ。ケプケはいくつも名前をもっている。

「チャーリーはなんて云いましたの。」

「あなたが有名すぎるっていうんです。」

「それはチャーリーの口実です。上海であたしの名はよく知れていましたが、あたしたちは協力しました。それにあたしは東京に住むのではない。これまで通り上海で協力しようというのです。」

それも大里はケプケに云ったのだ。

膝の上に重ねたスーザの手を、大里はとる。なんと云ったらよいか、ためらっていると、扉をノックする音がした。

「どうぞ。」

すうっとスーザのわきを離れ、大里はもとの席に戻る。

灰色の上被りをきた二十位の給仕女が、紅茶をのせた盆を、卓子においた。

「有難う。御苦労さん。」

給仕女は扉をしめ、消えた。足音に大里は耳をすます。R新聞は日本で最大の新聞といわれている。面会人も多い。卓子がいくつか並んだコミの面会所もあるし、貴賓室もあるが、その応接室は主に高級社員が来客用に使うのである。

大里は紅茶を、スーザに渡した。

「ケプケがあなたを信用していることを僕は知っている。だから一昨年事変後の満州や華北を視察するため、年末休暇を利用して、僕が北京に行った時、あなたにケプケの情報機関のことを話しました。」

大里は考え考え云う。スーザもその時上海から、北京へ行っていたのだ。

「僕は上海時代からなんでもあなたに打明けることにしていましたからね。」

スーザはうなずく。大里が社命で上海を引揚げた翌々年、ケプケはまるで大里のあとを追うように東京で情報機関を組織するためやってきた。ケプケは表面ベルリンX紙特派員であり、ナチス黨員だ。ドイツ大使館にも自由に出入りし、大使クリンゲルの信用が厚い。しかしそのじぶん大里はケプケを訪ねることもなく、ケプケが訪ねてくることもなかった。上海から引揚げるときケプケの機関から身を引いたのである。ケプケもそれを認めたのだ。ところがある日生田という男がR新聞社に訪ねてきた。アメリカ帰りの画家というふれこみだった。会ってみるとケプケの密使だったのである。その男はチ

チャーリーの署名のある手紙を懐から出した。特徴のある筆蹟に覚えがある。三日後奈良公園の猿沢池のそばで会いたいというのだ。その日は木曜だった。土曜の夜大里は東京を立った。ケプケは時刻も指定していた。ケプケが東京で情報機関を作っているらしいことはうすうす大里は察していたが、果してその通りだった。上海以来はじめて会ったケプケは大里が再び機関に入るのを望んだのだ。大里のような洞察力のある、社会的地位のある人間が居ないからというのであった――

大里は北京でそんなことをスーザに話したのである。スーザはいまそのことを浮べた。しかしその時はケプケの機関に入りたいとは考えなかった。今度の旅で、彼女はそれが切実な問題になったのだ。「チャーリーに協力したい」という意味の手紙をニューヨークから、R新聞社の大里宛出したのである。

「あなたの手紙を受取ったとき、僕の頭に浮んだことは我々はまた上海時代のように協力出来るということだったのです。」

冷めた紅茶で喉をうるおすと大里は、続けた。

「チャーリーが拒絶した理由が薄弱です。モスクワのコミンテルンの本部でもあなたを認めている。瑞金の、中華ソヴェート共和国臨時中央政府では、あなたを大切な同志として扱っている。」

中国語と、英語を交じえて、大里は急いで云った。大里はコミンテルンにおけるケプケの地位を知らない。仕事の性質上ケプケに聞いた다는ことは慎んでいる。いろんな情勢からコミンテルンの特殊な重要部門に属すると共に、ソ連政府機関に密着している人物と解していた。(ケプケは以前コミンテルンの情報局次長だったのである) スーザはコミンテルンでこれという地位は持たない。しかし中